

島からの挑戦

ウィンブルドンを見て

益崎 真治*

The Challenge from the Island

Dreaming of the Wimbledon Tennis Rally

Shinji Masuzaki*

Abstract

Here, it announces about the activity of the woman tennis club at the school on the uncommon island in the whole country. This club left the good showing which is not so far. The victory is three times and the 2nd is twice.

The school on the island which doesn't have a bridge is 2 school in National College of Technology in Japan. The motive which began the way of guiding, the way of practicing, the environment, the tennis guide in such the handicap is described.

1. はじめに

ここでは、全国でも珍しい離島というハンディをもった本校のクラブ活動の中で大会史上に残る好成績を残した女子テニス部の活躍と顧問の指導方法について述べる。女子テニス部を始めて8年、とうとう全国高等専門学校の大大会においてシングルス、ダブルスともにダブル優勝、さらにペアそれぞれがシングルスで同年ではないが優勝、準優勝をした。また1年目にシングルス準優勝、2年目にシングルス、ダブルスともに優勝、3年目に2年連続ダブルス優勝とい偉業を達成した選手は過去に例がない¹⁾。

現在、橋もかかっていない島にある高専は全国で本校を含めて2校である。以下では、このような学校から素人の顧問と当然テニスとは縁遠い学生を率いてクラブを始めたきっかけ、その指導方法と色々なマイナス面をプラスにした考え方、精神面での指導、他の高専の環境と選手の比較についても述べる。

2. きっかけと目標

テニス部に女子学生が入部してきたのは、もともと男子校だった本校に女子学生が入学してきた15年前のことである。その時テニス部に入部した2名は男子の中で練習を行い、すぐにやめていたようである。次に女子が入部してきたのは8年前である。しかし、それだけでは筆者もクラブの顧問として本気で面倒は見なかったである

表1 四国地区6高専での本校の成績

年度(平成)	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
全体順位	3	6	4	6	6	6	5	6	6	6
テニス男子	4	3	2	5	3	5	1	1	4	6

う。最大のきっかけは、学校全体のクラブ活動が低迷したことにあった²⁾。表1に示すようにH6年以前は四国高専6校中で常に上位に位置していた本校の成績はトップの交代(H6, 11, 13年)により一気に最下位まで下降した。このクラブ活動の低迷した中で何とか勝てる種目を作れないかと考えたのが一番のきっかけである。学生時代から少し経験があり、趣味で行っていたテニスならなんとかできると考えた。女子部員のいなかったテニス部なら一から指導を始められると思い顧問に立候補した。当初の目標は平成7年から3年計画で全国大会へ出場することであった。

ところが2年目の平成8年に初めて四国地区の予選に出場、これならいけると思いそこから全国大会へ向けて表2のような目標を立てた。この計画のきっかけとなったのは、この時の四国から全国大会へ出場した女子ダブルスの1チームが全国大会で3位となったことを聞いてからである。これなら来年は勝てると思っていた。考えは甘く当然この計画通りには行かなかった。あとで気づいたことであるが、3位になったそのチームは当初12チームの全国大会のドローの中で抽選によりたまたま1回戦がなく、2回戦の1試合で1回勝っただけであった。

表2 全国大会へ向けて当初の目標と成績

年度(平成)	目標	成績
9	全国出場	シングルス(X) 全国出場1回戦敗退
10	1回戦突破	予選敗退
11 X, Y 5年 Z 3年 Z 退部	2回戦突破 (3位入賞)	シングルス(X) ダブルス(YZ ペア) 全国出場 共に1回戦敗退
12 A, B 3年	2回戦突破 (3位入賞)	シングル(A, B), ダブルス(AB ペア) 全国出場, シングルス準優勝, ダブルス1回戦敗退

注) X, Y, Z, A, B は出場学生を表す。

このことがわかったのは、翌年の平成9年、初めてシングルスで予選準優勝して全国大会へ出場、1回戦で敗退したときであった。当初女子の全国大会出場枠は、シングルス16人、ダブルス12ペアであった。これでは、予選では勝っても全国大会では勝てないことを実感して帰った初の全国大会であった。しかし、その目標ですでにスタートしていた。もう戻れないと思っていた。あきらめなかったせいなのか、その目標は現実となり、間違っていなかったことが証明された。11年にはダブルスの出場枠も増えて16ペアとなり、四国の予選で準優勝チームにも出場権が得られるようになった。当然シングルの準優勝も出場可能であるが、この年、本校が全国大会を主催したのをきっかけにシングルス、ダブルス両方で全国大会出場権を得た。12年には全国大会シングルスで準優勝という記録が出た。当初の目標に3位以内の入賞以上の目標はなかった。当然それ以上勝ちあがれるとは思っていなかった。

しかし、H12年の全国大会準優勝が自信となり、全国の頂点を見たことで新たに表3のような目標を立てた。この目標も間違っていなかった。ここからさらなる好結果が生まれることになったのである。

表3 好結果を生んだ目標とその成績

年度(平成)	目標	成績
13 A, B 4年	シングルス, ダブルス 全国ベスト4	シングルス (A)優勝, ダブルス (AB ペア)優勝
14 A, B 5年	ダブルス, 全国ベスト4 シングルス ペアがベスト4	ダブルス (AB ペア)優勝 シングルス (B)準優勝
15	全国大会出場	未定

3. 島・船・田舎のハンディ

このような結果の背景には色々な人的、物的、精神的なプラス面があり、さらにマイナス面がプラスに転じた面があったように思える。マイナス面ではどうしてもスタート時点で越えられないハンディが島という点であった。これは何をあいても他の学校と比較できないハンディである。時間、活動費、どうにもならない天候など島以外では考えられないことが多い。特に次の点であるが、このような点は個人のクラブ活動に対するやる気をそなうことが多い。

- 1時間に1便程度の船による時間の制約
- 登下校の時間制約による入部者の確保
- 天候不良による練習、試合等の不便さ
- 練習相手の確保
- 資金面での苦勞

島ということで船便の制約と登下校に時間がかかるということは、部員確保とクラブ活動の低迷という問題にもつながる。天候不良等で船が欠航になると練習試合、試合等に参加できなくなり学生はがっかりすることが多い。また、都会のようにいつでも車で移動できる環境ではなく、最低でも近くでテニス部のある高校までフェリーと橋を渡って2時間もかかる。もちろん資金面でもかなりの負担がかかる。この中で5年間クラブ活動を行うのは並大抵の努力ではないことは言うまでもない。

さらに、このような状況の中で一番の敵は、学校内のクラブ活動の低迷(表1)により他のクラブ活動が盛んに行われていないことである。特に女子学生の数は全校で100人程度と少ない。クラブ活動を毎日行っている学生はテニス部を含めて女子では1桁程度の人数である。その中でがんばらせること、やめさせないことは大変である(表4)。

敵は常に内側にいると今でも感じている。

表4 本校の女子テニス部員数

年度(平成)	7	8	9	10	11	12	13	14	15
部員数	3	5	6	8	8	2	2	5	3
退部学生	0	1	0	0	0	1	0	0	0

4. マイナス面からの逆転

このような島というハンディから生まれる次のようなマイナス面をプラス思考に変えることが出来たのも一つの勝因ではないかと考えられる。

- 時間の制約には短時間で成果を上げる練習
 - 練習相手の不足には社会人との練習
 - 部員の不足は練習密度の向上
 - クラブ活動の低迷はエリート意識を持つ
- 後に対戦相手の強豪を調査したところ、そのほとんど

が、学生同士（高校生も含む）の練習と練習試合を繰り返しており、時間とコートの利用制限に制約がない場合が多い。さらに、練習時間がしっかりしており、かならず休みも取る、無理矢理やらせない、部員はやはり少ないというのが現状であった。

このことから上の4点で部員が少ない点はどこも同じで練習密度の向上やコート利用による練習場所の制約がないことにつながっているようである。しかしその他の部分では、本校は登下校による時間の制約があることは逆に効果を上げ、練習相手の不足が、社会人を相手に常に練習することで上達につながったようである。これは本校のテニスが他の学校の上位の選手と違う点を全国大会で他校の先生や審判の方々に指摘された時に気がついたことである。その時の笑い話ではあるが、決勝に勝ちあがる相手は常に日焼けで真っ黒に焼けているのに対して、本校の学生は真っ白だと言われた点である。まさに社会人の日焼けどめの考え方を取り入れた学生が、プレーも取り入れている証拠である。

最後に本校クラブ活動の低迷は、本当にチャンスを与えてくれた。過去の先輩が勝つことで自分たちも勝てる。勝てるのは自分たちだけだという意識を持つことでがんばれたようである。さらに、これを決定付けたのが他の学生と比較できる校内マラソン大会である。必ず10位以内に入る目標を持たせた。舞台へあがって表彰してもらえる唯一の校内行事である。低迷している学校では、必死で走る学生は少ない。自分たちがスポーツに関してエリートであることを植え付けるよい機会であった。部員が5名以内の時は全員10位以内に入っていた。これがクリアできない学生はその後1ヶ月毎日マラソンをしなければならないという取り決めを作っているのである。

後に感じたことであるが、校内のマラソン大会では表彰してもらえても、全国大会で優勝し四国地区高専体育協会等からいただいた表彰状は本人に手渡しで表彰しなかった。本当に学生に申し訳なかった。低迷している学校であることが証明されたようだった。しかし、これに発憤してくれた学生のおかげで2年連続という栄光が得られたようだ。それでも表彰はなくこの二人の学生は卒業していった。戦った全国の強豪の中には全国大会3位以上の入賞者は学校の玄関にその栄光が写真とともに飾られているところもある。全国優勝の記録に対しては全員の先生の前で（教官会議）表彰する学校もあるようだ。しかしこのようなことが顧問の中でやる気を出させた点もまちがいないようである。

その他にマイナス面から逆転して勝因となった出来事として、13年のダブル優勝の前年に敷地移動によりテニスコートが使えなくなった点がある。この間、7月から12月までの半年間を民間のテニスコートを借り練習した成果が出たと考えられる。現在、全国大会へ出場する強豪のほとんどの学校がオムニコートもしくはハードコートがあり、ナイターまでであるという立派な設備を持って

いる。これに対して、本校ではテニスコートの設備が貧相である。ただの土でできた荒れたクレートコート、当然ナイター設備などはない。しかし、この突然やってきた工事のおかげで半年間、試合の会場と同じ条件のオムニコートで練習することとなった。さらにナイターも使うことで練習効果を上げることができた。当然良いコートでは学生もやる気がでるのが証明できたようである。もちろん資金面で大変だったため、学生も必死でやることさらに効果を出したようである。

5. 精神面での指導

次に精神面での指導として、目標を立てること、標語を用いること、常にどんな気持ちでいるべきかについて話してきたことを述べる。

まず表2、3の目標を1年ごとに学生に徹底して聞かせた。さらに次章で述べる1年単位の練習目標への到達を意識させることである。

そして標語であるが、これは過去に松岡修造、福井烈などプロ選手のレッスン、多くの指導者のレッスンから学んだものである。

- 自分を信じる（松岡プロ）
- 目標を持って（福井プロ）
- 夢は必ず叶う
- 努力は必ず答えてくれる

などである。レッスンの時々言葉は、簡単ではあるが、学生の心に深く残り、精神的影響は大きかった。これらを常に練習時に言い聞かせることによって意識が生まれたようである。これらの中から生まれたクラブの標語は“努力なくして栄光なし”である。

最後に、常に学生に言い聞かせる事がある。それは本校のクラブの中での存在である。

- 常にエリートであれ!!
- 勉強を優先して行え!!

ということである。校内で他のクラブがどこも活動していない時の練習ほど寂しいものはない。上述のマラソン大会もそうであるが、自分が低迷した学校を背負っていくエリートであり、そのためには勉強もしっかりすることを常に指導してきた。これらが勝つためと将来の人生勉強になると学んだのは数々の外部のレッスンに学生とともに参加した結果（表5）であり、今でもこれを信じて指導している。

勉強優先という点については試験期間中、発表中も一切練習は行わず、特に高校の大会は学校行事の予定の違いにより、定期試験日程中や夏休み期間になるためほとんど参加していない。島のため参加するリスクも大きいのがもう一つの理由である。また、まじめでやる気のある子ほど、テストの結果も気になるものである。ウインブルドンに常に夢見ていたが、高専の全国大会が目標ならこれで十分であった。結果として、この記録を出した

表5 外部コーチによるレッスンへの参加

年度(平成)	コ ー チ 名	顧問の参加
7	上本コーチ(広島)	
8	上本コーチ	
9	田村プロ 金島コーチ(広島)	
10	福井, 田村プロ 金島コーチ	
11	松岡プロ 金島コーチ 岩岡コーチ(愛媛)	顧問のみ
12	雉牟田プロ 金島, 岩岡コーチ	
13	松岡プロ 長塚プロ 金島2回, 岩岡コーチ	顧問のみ
14	金島2回, 岩岡コーチ	
15	田村プロ 金島, 岩岡コーチ	顧問のみ

二人の学生は県内の高校生の大会に一度も参加していないため結果すらない。勉強の成績は常にクラスで上位であり二人で1番を競うこともあった。

6. 練習方法での努力と目標

当然この8年の中ではテニスの技術的な指導なくして栄光は得られなかった。顧問自身も指導者の勉強、テニスの技術を学ぶため多くの指導者のレッスンに参加した。専門家が一人もないこの島にとってはこれらのレッスンがすべて教科書であった(表5)。その中で選手としては全日本マスターズ、ベテラン選手権等に優勝をし、コーチとしても教師、指導者ともA級の資格を持つ広島県の上本コーチから当初に学んだことがある。

- 指導者が熱心であれば必ず子供は伸びる。
- 正しいと思ったことだけ教える。

簡単なことであった。前述の標語の中で“夢は叶う”，“努力は答えてくれる”と教えてくれたのもこのコーチである。

上本コーチから当初の練習方法や指導方法を学んだ。さらにプロや地元の指導者であるクラブコーチのレッスンへ学生と共に参加してその指導方法を学んだ。毎年レッスンに参加するたびに技術的に目標を立てて練習を行ってきた。その詳細については書ききれないが、1年目からの技術的目標は次の通りである

- ボレー, ストローク(1, 2年目)
- サーブ, スマッシュ(3年目)
- ロブ, ミニテニス(4年目)
- ステップ, ポーチ(5年目)
- スナップショット, ドロップショット

ロブボレー(6年目)

- グランドスマッシュ(7年目)

またレッスンを受けた指導の中から指導者(顧問)も努力する必要があるということ教えられた。クラブも授業も熱心に指導して、面倒を見るだけなら誰にでもできることはわかっている。やはり努力である。人がやらないことをやらない限り効果も出せないと思った。そこで、練習以外で目標を持って始めた事に次の三点がある。

- 全国大会の主催(1999)
- 公開講座の開催
- 島内でのテニス大会の主催

全国大会は11年にすでに終わっているが、主催校として女子枠はないものの運営に携わることの経験が役に立つと思った。幸運にして、その年に初めてシングルス(X学生)で予選優勝をして全国大会に参加できることになった。選手宣誓の代表にもなった。この時運営で表彰式の担当を行った二人(表2のA, B学生)が、その後、大記録を達成することとなった。

公開講座については今でも行っている。これによってコーチを呼び、学生も一緒に初心者のお世話をすることで自分が学ぶのである。現在では子供の指導がなんとか行えるようになってきた。この公開講座も今年で13回目を迎え、校内で一番多い講座となった。

最後にテニス大会の主催である。初めて全国大会へ出場するレベルになったことで自信をつけ、さらなるレベルアップのため学生主体で弓削島でのテニス大会を毎年始めた。島外からの実力者を招いて学生の相手をしてもらうのが目的である。競技運営を行うことも上達につながることを確信した。今年で6回目の大会となっている。これも校内では、クラブで大会を開いて続けている唯一のクラブとなった。

7. おわりに

おわりに現在までのクラブの方針と他校との比較、勝利の功績についてまとめる。

クラブの方針として最初から徹底して行ってきた点は

- 時折の試合以外は日曜日, 長期休業中は休み(全国大会時は除く)
- 男子と練習しない
- 無理矢理部員を介入しない
- 茶髪, ピアス, ルーズソックス等禁止

などである。やる気のある子を伸ばすため何かいい方法がないか、結果をそれによって出せないかということ考えた末の方針である。

次に全国大会で戦った強豪の学校を調査してわかったことであるが、その中で男子と練習を行っている学校は少ないこと、休みのとりかた、部員が少ないという点、そしてどこも顧問が熱心である点は共通していることがわかった。そしてその強さは本人のやる気であることも

調査でわかった。調査を行った強豪の学校の選手にはそれなりの努力があった。その方法はいろいろである。レッスンに個人で通っている子、家族の助けをもらって家族ぐるみで努力している子、ジュニアのころから努力している子などいろいろである。しかし本校の学生は上記のどれにも当てはまらない学生ばかりである。島という僻地のため、幼少のころからテニスをするような環境は昔からないため家族や島民を含めてだれもがテニスを経験したことがない。ただ外からの知識で独自に行っている者ばかりである。当然レッスンをしてくれるようなクラブは近くに存在しない。これらの点はクラブ運営において他校と決定的に違う点であった。また、学校の環境という点で違う点は、強豪の学校では、本校と違いクラブに対する前向きな姿勢と設備的にも良い環境が整っていることは間違いない。これらが良い結果につながっている事もまたまちがいないようである。

しかし、このような島という環境の中でも本校の女子テニス部が好成績を出せたことにより、私をもっとも学んだことは、少々環境が悪くても学生のやる気は何にも負けない強さがあるということである。昨年の大会では中学でソフトテニスのラケットさえ握った事もなく、名も知れないバレー部だった子が、5年の最後には東京の高校生都大会で活躍するような子に勝ち準優勝、中学で何の実績のなかったソフトテニス部だった子が3年間上位を占め優勝するようなことが起きた。これらがなよりの証拠である。ウインブルドンには行けなくても夢は叶うことを実感した。その功績に対していただいた数々の表彰の結果を表6に示す。これらは彼女らと私の人生のかけがえのない宝物である。

最後にやればできるということを教えてくれた学生達、多大な時間を費やすことにいつも協力してくれる家族に感謝する。そして小さいときから両親に“なんでも1番になれ”と教えられた。勉強では叶わなかった事が、ク

ラブの成績、公開講座、大会の主催などで校内で1番になれたことを両親に感謝する。これからも体力が続く限り、やる気のある学生の期待に答えて指導を続けていきたいと思う。

この内容はH15年全国高専教育研究集会で発表、高専教育へも投稿したものである。いずれも本校からの教育論文の発表、投稿はこの数年行われていないようである。低迷している学校を証明しているようである。筆者が言いたいのは他の高専においても本校のように人事や予算、個人の研究、独法化、専攻科等の仕事に目をとられず、学生の教育にもっと目を向けてもらわなければ本校のような低迷した学校になってしまうということである。今後このような状態（態勢）が続かないことを願っている。

参考文献

- 1) 全国高専体育協会：第37回全国高等専門学校体育大会プログラム、第25回全国高等専門学校テニス選手権大会プログラム成績一覧、仙台電波高専、(2002)
- 2) 四国地区高専体育協会：第39回四国地区高専体育大会プログラム成績一覧、詫間電波 高専、(2002)

表6 各種表彰記録

年度(平成)	表彰内容
12, 13, 14年	愛媛県体育協会スポーツ賞
"	愛媛県テニス協会優秀賞
13年	愛媛県議会スポーツ振興議員連盟表彰
"	四国地区高専体育協議会 シングルス、ダブルス特別表彰(全国大会優勝)
13, 14年	広島県体育協会体育賞
"	広島県テニス協会優秀賞
"	広島県久保スポーツ振興基金表彰
"	因島市体育協会賞
13年	愛媛県体育協会優秀指導者賞(顧問)
"	愛媛県テニス協会優秀指導者賞(顧問)
14年	四国地区高専体育協議会特別表彰 (全国大会ダブルス優勝、四国地区大会シングルス、ダブルス3年連続優勝)

